

たくみ

Craftsmanship

特集 阿部眞士作陶展

第19号

災害からの復興 横浜中華街と沖繩

鎌倉の稲村ガ崎に越して四年になる。子供のころは江ノ島に近い腰越に母方の家があったから、湘南は気持ちの上では身近な存在であった。それでも相模や神奈川という地域が自分にとってのホームグラウンドだという意識は、最近になってからである。

それには地元紙神奈川新聞の影響も大きい。コラム、特集や連載ものによりと地元に関連するものが多いのだが、東京に近いだけにそれがローカルな記事にならず、むしろ問題の拡がりを感じさせる。開港百五十年企画のペリーの黒船来航前後の史話や米軍基地の問題なども中央紙にはない切り口である。

それとやはり近頃では災害関係の記事である。一九二三年(大正十二年)の関東大震災も横浜、川崎などの市街地だけでなく、鎌倉、鶴沼、茅ヶ崎、小田原、箱根をはじめ広範囲に大きな

被害があったと知った。横浜の中華街も全滅、腰越の母の家も倒壊した。

その後復興した横浜だが、今次大戦の終末の一九四五年(昭和二十年)五月二十九日、来襲したアメリカのB29五百機、P51百機による集中爆撃によって一挙に壊滅した。中華街も炎に包まれ、辛うじて山下町に逃げた人たちが助かったという。

戦後の中華街の再建は、生き残った人たちと、疎開や徴用から帰った人々によってまず始められたが、今日の盛況をみると人間の未来への希望とあくなき努力の偉大さをつよく思う。

沖繩もまたそうであった。一九四五年三月から六月にかけての沖繩決戦で、一木一草も残さないような焦土と化した沖繩だったが、生き抜くための復興は戦争終結の日から民衆自らによって始められたのであった。その様子をおぼふことのできる文章が昭和二十年代の「月刊たくみ」にある。今号に再録する次第である。

(志賀直邦)

たくみ企画展

阿部眞士作陶展

会 期 平成十七年六月二十五日（土）～三十日（木）

六月二十六日（日）は営業いたしません。

会 場 たくみ二階サロン

営業時間 十一時から十九時まで（日曜日・最終日は十七時半まで）

磁器の仕事と登り窯

阿部 眞士

私が小学生の時に、父・阿部祐工が祐工窯を立ちあげました。その頃は民藝に対して深く理解のある時代でした。当時、五室ある登り窯を年に三・四回焚いていた事を覚えています。物を作ってから窯に入れるのではなく、窯のサヤや棚などの寸法に合わせて、物作りが始まります。その後、窯の何処に何を入れるか窯割りをします。又、窯の日程に合わせて、作る物が決まります。五台あるロク口には、いつも誰

かが座って仕事をしていました。

道具は皆自前で、流れるようにロク口成形と削りをし、板に整然と物が並んでいきましました。乾燥台で器が太陽の日差しにあたると、眩しく美しく感じました。窯焚きは大変で、窯に火をいれるまでは多忙です。窯焚きの最中、私はよく薪運びをしていました。

父が窯の覗き穴から窯の中を見て、大きな声で叫んだ事があります。「下びきになつている（炎が下を流れ、上部の温度が上がらない。）ダンバーを占める！」緊張がはしり、炎の流れが変わった時、皆ホツとしたものでした。闇夜に薪の焼ける音が静寂の中に響き



祐工窯の遠景



口クロ仕事の阿部眞土さん

ます。

窯焚きの時の夕飯は、ご馳走が用意されていて、子供だった私にとって窯焚きは、楽しみな時でした。その登り窯を焚かなくなると、十年以上過ぎました。私が磁器の仕事を始めましたからです。

磁器を薪窯で焚くのは非常に難しく、口スが出る仕事です。白い器に、薪の灰がひとつでも落ちれば、二級品といわれてしまう昨今、純白の白磁が良い

か、少々灰が落ちても李朝や古伊万里風が良いか、考えさせられる事しばしばです。いつの日か、磁器を以前のように登り窯で焚きたいと思っています。

昨年私は、磁器の仕事で日本民藝館賞を頂きました。賞を頂いた大鉢は、電気とガスの併用の窯で焼いた物です。磁器の仕事を本格的に始めて、十年になります。今でも磁土も釉薬も試

行錯誤の連続の日々です。磁土については二種類の土をブレンドしていません。磁器の釉薬が、どうしても上手くいかなかった時、モル比（アルカリと珪酸の比率）の数値の出し方を、父に教わった事が良い結果につながっていききました。釉薬が定まらない時、瑠璃釉、飴釉、辰砂、色絵といろいろ試し、今ではその一つ一つが、自分自身の作品づくりに欠かせないものになりつつあるようです。作陶をはじめて二十年が過ぎ、自分の仕事の方向性が見えてきた事がとても嬉しく思います。

磁器の世界の素晴らしさと厳しさをご教示下さった、師・瀧田頂一先生。民藝館や大阪の東洋陶磁美術館などにある李朝や古伊万里の焼き物に感謝が尽きません。皆様のお力添えで仕事が出来ている事に感謝しております。

銀座たくみでお世話になって、今回で八回目の作陶展です。今の私の仕事を多くの方々に、ご覧いただければ幸いに存じます。

壺屋の新作

柳 宗悦

有難いことに壺屋は助かった。沖縄唯一の窯場であるだけ、之が戦禍から免れたのは、島にとってどんなに幸せな事であるか知れぬ。首里及び那覇は見る影もない有様であるが、その中間にあるこの窯場ばかりは奇蹟的に助か



琉球工藝文化展が開かれた東横百貨店

った。戦後すぐ島の需要に応じて食器を作ったと云うが、彩料など不足で、遠い私などにも相談や依頼があった。

その後進駐兵向きの、やくざな品物を作ることを余儀なくされて、見るものを慨嘆させたというが、併しいつしか本来の面目に帰り、去年東京の東横百貨店で民藝協会の努力で大展観をやった。私は外遊中の不在で見ると得なかつたが、先日倉敷の民藝館で沢山買入れた品をみて、全く驚いた。

苛烈な戦争で多くの陶工を失い、長く仕事を休み、つまらぬ焼物を作つて漸く経済をつないでいたに拘わらず、大した本来の面目を輝き出させた。或る品では旧のものより更に優るものさへ創造しているではないか。誠に健在なのを見て、感嘆せざるを得なかつた。濱田とも話したことであるが、どう

してそんな底力を持つていいのか。日本の本土のどれよりも、もう一段原始の力を保有して、本当の品物たる力を失つておらぬ。それは沖縄の特異な材料の良さなどでは説明が出来ぬ。只優れた伝統的な手法によるからとも簡単には云えぬ。

どうしてももう一つ奥があつて、沖縄人の暮しの心そのものに由来する所があるのである。形にも絵付けにもとても自由な所がある、この自由は心の自由に依るのだと云える。つまり上手とか下手とかに縛られない自由さなのであるが、之は沖縄人の心の状態に因縁するものであつて、知識とか技術とかよりも、もつと根が深い。

私達は再びこういう壺屋の品を日常に使えるようになった事の幸いを感謝したいが、それよりも尚これ等の質素な器物から、美の法則を色々学び得ることを一層感謝したい。昔の多くの焼物の美しさの秘密を、現在焼き続けているこれ等のものの中に、まともになら



琉球工芸文化展の壺屋陶器の展示場

かがい得ることも大きな恵みではないか。

この島はひどい戦禍を受けただけに、立ち直るためには、どうしてもその産業を再興せねばならぬ。その中で文化的に大きな意味を持つものは、その土地で生まれた手仕事の他にはあるまい。先ず第一に壺屋が立ち上がったのは朗報である。続いて何とか染織類、せめてもその緋類の復興を見たい。ま

だ織り手は幾人も生き残っているのであるから。次には漆器も何とかならぬであろうか。これ等の事に関し民藝協会は永久に沖繩の友達でありたい。

戦後初の沖繩渡航

上野 訓治

近く「たくみ」で戦後第二回目の壺屋展がある由で、今度は自分も真つ先に見にゆきたい。
(昭和二十八年八月・たくみ第八号)

夜中の一時に羽田空港を飛び立ったノース・ウエスト機は、明け方の六時には沖繩本島の国頭から島尻へと縦断コースをとっていた。

碧緑の海の色や、波立つ海岸線の美しさは十二年前にきた時と少しも変わっていなかった。濃い緑に包まれて夢のように浮かぶ島、ここで二十余万人の命を絶つような激戦があったのかと、不思議な気がした。

小祿の飛行場から車を走らせて見ると、無残な廃墟となった那覇市が視界に入ってきた。かつて王城の地であった首里も一物も残さず焦土と化し、全く昔の面影はなく、建築美を誇った守

禮の門や正殿、貴重な古利円覚寺も惜しいかな、今は記録写真によって在りし日の姿を偲ぶより外はない。地形が変貌し石垣は飛散し、ただ焼けただけの大樹が数本残されているだけである。形ある沖繩の文化財はこんどの戦争によって、この世から姿を消したと云つても過言ではない。

しかし、民族の血の中に流れている力強い伝統までは破壊されていなかった。当時捕虜になった島の人たちは、先づ、缶詰の空き缶にパラシュートの布を張り、玉子の白味を塗った糸糸を使って蛇味線の代用品をこしらえてペンコペンコと毎夜、歌と踊りを楽しん



琉球工芸文化展の会場入口正面

だという。沖縄では歌や踊りは暮しの一部である。戦後の生活物資の不足はいづこも同じ状態であった。ことに遠く離れた孤島沖縄では、まづ自給の途を選ばなければならなかった。

幸い壺屋(陶器を作る部落)が被害が少なかったので、日常欠くことのできない、まかい(飯茶碗)わんぶう(井鉢)からから(酒器)皿などの食器が作り始められた。

その後進駐軍の土産物が盛んになるにつれて、古典焼と称する芭蕉の葉や唐獅子を彫り出したものが再び登場、更に焼締め風のものに青や赤のペンキを塗ったものまで作り出した。しかしこれらの生産も永い寿命ではなかった。

幸い、我々と繋がり深い作り手もあり、戦前作ったあらゆる種類の形、釉薬、絵付けなどの手法を一通り復習した試作品を一窯焚いてもらった。焼け上った作品を見ると、少しも格は崩れていなかった。実に立派で、壺屋本

来の姿であった。手法の豊富なことを今更ながら驚きの目を見張り、お互いによるこび合った。

この壺屋は、田畑の真中であって、美しい松林に囲まれた景色のよい窯場であったが、戦後ここを中心に新那覇市が誕生し繁華街となって終日雑踏をきわめている。この喧騒の間を縫って窯焚きの煙がゆっくりと上がっている。他では見られない珍しい窯場風景である。

(昭和二十七年十月・たくみ第一号)

沖縄だより

船木 研児

第一信 柳悦孝氏宛

出発の際はいろいろお世話様でした。嘉手納飛行場に着いた朝から今日まで全くの晴天続きで、お昼すぎの暑さはご存知の通りであります。しかし、お陰で来島以来すこぶる元氣、張り切

った日々をすごしています。役所や新聞社関係の挨拶回りに数日をつぶし、十八日はじめてロクロを蹴ってみました。話には聞かされていましたが、それ以上に作り難い土なので全く閉口しています。とくにミルク注ぎやピッチャーの手をつくるには全く難しい土



琉球工藝文化展を観る高松宮兩殿下

です。なかなか苦しい仕事をしなければならぬようです。

來島以来、又吉市長さんの厚いお心づくしで全く勿体ない日々です。これというのも今までの民藝協会との交わり、殊に諸先生の功德の賜と深く感謝しています。

昨日(二十二日)、市長さんが名護に御用がおりでしたので、この機会に国頭の方を回ってはどういうことで、喜久山さんなどと市長さんの車に便乗、今日は喜如嘉にゆきました。実際

に芭蕉布のできる村を訪ねて、芭蕉布に対する愛着を深めました。昨年の倍位の生産高とかで、なかなか盛んでした。

さらに北上してみようかというので、とうとう最北端の辺土崎までゆきました。喜久山さんから民藝協会の方でここまで来られた方はないでしょうと聞かされ、記録破りの快味に大喜びしました。全くすばらしい景色がつかえます。暑さに負けない以上、この輝くような夏陽の沖繩に来たことを嬉しく思います。

山里永吉さんのご案内で過日首里に参りました。写真で見えていた首里はどこにもなく、呆然となりました。しかし博物館は立派に新築せられています。今並べられているものは、東京の民藝館より落ちていて、柳先生の業績のいよいよ大きくなっていることを感じました。

窯も近いので明日から少し本腰になって試作する考えです。

第二信 柳悦孝氏宛

御無沙汰しました。皆様お変わりありませんか。こちらは全く雨がなく、暑い日が続いています。

前にも申し上げましたが、なれない土でいろいろ悪戦しています。もう十日余りで窯を焚きますから、近いうちに第一回の結果を見ることができますが、楽しみ半分、不安半分です。

いずれ品物ができれば、山里さんのお骨折りで一寸した展示会の催しが、一番繁華街のサロン風な場所で予約されています。

喜久山さんのお宅でご厄介になるようになって初めて琉球料理をいただき、喜んで賞味させて頂いています。この間は喜久山のおばあさんの案内で芝居を見ました。ムンジユル踊り、とても面白く見ました。皆さんとても遠慮なしに扱って下さいますので、かえって気軽くお世話になっていきます。

(昭和二十八年八月・たくみ第八号)



江戸風鈴(左)と南部鉄の風鈴

たくみ歳時記 鉄とガラスの風鈴

風鈴は初夏の風物詩、そよ風に揺らいでチリリンと鳴るあの音色が、涼を呼びます。

南部鉄の風鈴はたくみのオリジナルで、ゼリー型と名付けました。昔どこかの家庭にもあったゼリーの型を模し、

とくに釜石製鉄所の銑鉄と砂鉄を混合した高級品です。音色が透きとおるように心地よく響きます。

江戸風鈴で知られる吹きガラスの品は今なお江戸川で作っています。音色はやさしく、耳ざわりの良い逸品。模様は内側から彩色されています。

短冊は越中八尾の型染紙を用いました。価格はいずれも短冊付きで九百円、お手頃です。

あとがき

「月刊たくみ」は開店二年目の昭和十年(一九三五)十二月に、協会同人の座談会と商品案内を中心に一度出したことがある。戦後は二十七年十月に第一号を出し、三十一年十一月の二十四号で終刊となった。第三種郵便物の認可は二十九年三月に受け、翌年一月に民藝協会が雑誌「民藝」を復刊するに際しそちらにおゆずりした。

戦後の第一号には当時の仕入担当の上野訓治氏(旧姓鈴木)の沖縄渡航記がのっている。二十七年から民間サイドの沖縄渡航と交易が許され、その魁として上野氏と柳悦孝氏が派遣されたのであった。その成果は十一月六日からの「琉球工藝文化展」として実る。柳宗悦、船木研児両先生の文章もそれに関連してのものである。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)